

観音菩薩の宗教

⑨

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

三十三の化身を持つ菩薩

二〇〇九年、『アバター』という米英合作の映画がヒットした。半身不随になった人間が人工生命体に神経をつないでその身体を操作するSFで、ストーリー自体は陳腐だったが、当時最新の3D映像が大きな話題となった。私も都内で講義の後、最も設備の整った川崎の映画館に回り、特殊な眼鏡をかけて鑑賞したことを覚えている。アバターという言葉は、この映画以前からインターネットやゲームなどの仮想空間におけるユーザーの分身、キャラクターを意味するIT用語として知られていた。

しかしアバターはIT用語が起源ではない。その語源を探ると現代インド人にとっても馴染み深い宗教用語であった。インドの人口の八割近く

が信仰するヒンドゥー教の神々のうち、ヴィシュヌ神とシヴァ神は二大神とされる。なかでもヴィシュヌ神はアヴァターラを取る代表的な神格で、亀や猪など、十の姿になつて人々を救済すると信じられている。このうち九番目のアヴァターラはブツダとされ、ヒンドゥー教が仏教と融合しようとしたことがわかる。私の経験でも、インドでヴィシュヌ派の信者に「私は仏教徒だ」と言った時、握手を求められて「私と同じだ。ブツダはいい神様だ」となど共感されたことがある。ヴィシュヌ派によれば、ヴィシュヌ神が古代のインドにブツダとなって降臨し、衆生を救済したと解釈されている。

アヴァターラ思想は仏教にも見られる。日本においては本地垂迹説の思想のもと、大日如来や薬師如来、阿弥陀如来などが神道の神々に姿を変えて人々を救済するとされるが、仏教の思想か

ら見て権化自体をその特性にしているのは観音菩薩である。このことは、『観音経』に観音菩薩の三十三の姿として説かれていた。観音菩薩のこうした力を「普門示現」とか「応現」などといい、他の姿で説法することを「応現説法」という。『観音経』のサンスクリット語原文にはアヴァターラの語は見えないが、「観自在はくろの姿で法を説く(アヴァローキテーシユヴァロー・ルーペーナ・ダルマン・デーシャヤテ)」が繰り返されている。「くろ」に入る種々の姿が三十三の

権化、アヴァターラである。『観音経』の記述に従えば、観音菩薩は三十三の仏や神々、人々に姿を変えらるるとされる。以下、それらを九種に分けて見てみよう。

第一に挙げられるのは、三つの聖なる身体(三聖身)である仏身・臂支仏身・声聞身である。つまり、観音菩薩はブツダの姿で出現することもできることとなる。二番目は、六種の神々(六種天身)である梵王身・帝釈身・自在天身・大自在天身・天大将軍身・毘沙門身で



高尾山薬王院山門の毘沙門天像。左手には宝塔を捧げる通常、身色は黄色だが青色は珍しい。
昭和五十九年、大成浩 制作

ある。このうち毘沙門は多聞天ともいい、東大寺戒壇院の塑像や運慶作の木造の像が有名だが、たおやかな姿の観音菩薩が甲冑に身を固めた武人の姿に変身することが興味深い。三番目には、五種類の人間の身体(五種人身)である小玉身・長者身・居士身・宰官身・婆羅門身が列挙される。『マヌ法典』に定められたようなインド古来の保守社会はいわゆるカースト制度による身分制が強く、ここに見る五種の人々も、それぞれクシャトリーヤやバラモンといった階級に属している。四番目には、仏教の僧侶や信者(四部衆身)である比丘身・比丘尼身・優婆塞身・優婆夷身が挙げられる。比丘は男性の僧侶、比丘尼は尼、優婆塞は男性信者で優婆夷は女性信者である。このように男女問わず変身できるのは、観音菩薩が性を超越していることを示している。観音菩薩が比丘に

変化したと信ぜられている実例に、チベットの活仏ダライ・ラマがある。五番目には、四種類の女性である長者婦女身・居士婦女身・宰官婦女身・婆羅門婦女身が示される(四種婦女身)。上述した異なるカーストや職業に属する人々の女性版がこれである。しばしば観音菩薩が造像や絵画において女性的に製作されるのは、こうした理由による。『観音経』には、観音菩薩は「長者・居士・宰官・婆羅門の婦女身を以て得度すべき者には婦女の姿で現れ説法する」とも述べられており(「応以長者居士宰官婆羅門婦女身而為説法者、即現婦女身而為説法」)、観音菩薩が社会的地位のみならず、性の違いによっても臨機応変にその身を変えて救済することを説いている。六番目は二種の子供(二童身)、すなわち童男・童女である。現代社会、ことにリベリズムを旨

とする社会では、LGBTの主張のように性の垣根を越えた権利が叫ばれているが、その一方で生物学的にも文化的にも男女の性差があることは否定できない。子や孫を育て、実社会を生きていけば、男女に種々の違いがあることは確認できる。観音菩薩はこうした実態を踏まえ、時には男の子時には女の子に姿を変えて衆生を救済するということである。七番目は八種類の仏教を守護する神々である天身・龍身・夜叉身・乾闥婆身・阿修羅身・迦楼羅身・緊那羅身・摩睺羅伽身が挙げられる(八部衆身)。このうち迦楼羅は梵語のガルダの音写で、伝説上の金翅鳥をいう。ガルーダ・インドネシア航空の名はこのことから取っている。最後の九番目には、執金剛身が挙がる。執金剛とは正確には執金剛力士と称され、日本では仁王様とも呼ばれる。運慶とその弟子たちの手になる東

院内散歩 19

～薬王院の展示物～

木版画『東福院睡蓮』
作・井堂雅夫

大寺南大門の執金剛力士像は日本を代表する傑作とされるが、その筋骨隆々の巨軀と怨敵を睥睨する形相の迫力は、しなやかな身体と柔和な表情をたたえる薬師寺の国宝・聖観音菩薩像とは対照的である。観音菩薩は相手によっては本来の優しい柔軟相を厳しい忿怒相に変じて現れる。仏教では人を導く際、

相手の心身の状態に応じ、有りのままを受け入れる摂受と、相手を打ち砕くほど叱る折伏の二通りの方法を説く。執金剛身で現れるのは、折伏のためである。

以上、九区分しうる諸身を加算すると三十三となり、総じて観音菩薩の三十三身の応現という、冒頭の言葉を用いれば、アヴァターラである。